

第4回くまもと未来会議 議事録

日 時:平成22年7月9日(金) 15:30~17:10

場 所:熊本県庁 地下大会議室

テーマ:「夢のある教育」の実現に向けて

出席者: 小栗 宏夫 委員 (熊本経済同友会 代表幹事)
崎元 達郎 委員 (国立大学法人熊本大学 顧問)
田中 浩二 委員 (九州旅客鉄道株式会社 相談役)
橋田 紘一 委員 (株式会社九電工 代表取締役社長)
細川 佳代子 委員 (認定NPO法人スペシャルオリンピックス 名誉会長)
松島 正之 委員 (クレディ・スイス証券株式会社 会長)
蒲島 郁夫 議長 (熊本県知事)

【事務局】

それでは、ただ今から、第4回くまもと未来会議を開催いたします。私は、本会議の事務局であります企画振興部企画課の坂本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。まず始めに、委員の方々をご紹介させていただきます。

熊本経済同友会 代表幹事 小栗宏夫委員

国立大学法人熊本大学 顧問 崎元 達郎委員

崎元委員におかれましては、しばらくされてからお見えになります。

九州旅客鉄道株式会社 相談役 田中浩二委員

株式会社九電工 代表取締役社長 橋田紘一委員

認定NPO法人スペシャルオリンピックス 日本名誉会長 細川佳代子委員

クレディ・スイス証券株式会社 会長 松島正之委員

なお、

国立大学法人東京大学大学院情報学環 教授 姜尚中委員

株式会社東京証券取引所グループ 取締役兼代表執行役社長 斉藤惇委員

昭和大学 学長 坂東眞理子委員

におかれましては、本日所用のためご欠席でございます。それでは、これより議長が進行を行います。蒲島知事よろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

はい。本日は皆さん大変お忙しい中、くまもと未来会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。とりわけ、細川さんと松島さんには、遠路はるばるおいでいただきありがとうございます。

また、今日はたくさんの傍聴の方がいらっしやいますけれども、後ろ向きで申し訳ありませんが、後ろ向きのままやらせていただきます。

これまでくまもと未来会議は、3回開催しました。その間、委員の皆様から大変素晴らしい御意見をたくさんいただきました。その御意見を、今年度の取組みと併せて簡単にまとめております。それを事務局の方から説明をお願いします。

【事務局】

座ったまま失礼いたします。お手元の資料3ページ、参考資料1をご覧ください。右側の方にこれまでの未来会議におきまして、いただきました御意見を記載いたしております。左側には、今年度の主な取組みを分野別に整理しております。その中で、特にいただいた御意見に係る取組みには、アンダーラインを引いております。例えば、一番上の農林水産業の可能性の大きな飛躍のところでは、休耕田の活用について御意見を頂きましたが、今年度の取組みといたしましては、米粉米などの作付面積の倍増や、遊休農地への菜種等の景観作物の作付面積の拡大に取り組んでいるところです。また、下の所の高齢者が主役の地域づくりでは、高齢者の地域活動や起業化の取組みなど、高齢者が担い手となる活動を積極的に支援する取組みを始めたところです。めくっていただいて4ページの方にも、同じような整理をしております。新幹線全線開業、熊本の拠点向上では、東京・大阪など大都市圏に向けた情報発信について御意見があっておりますが、KANSAI 戦略と共に東京首都圏をメインターゲットとした戦略的な広報を展開することとしています。このように、県政の様々な分野で、この未来会議での御意見・御議論を参考にさせていただきながら取り組んでいるところです。以上です。

【蒲島議長】

これまで様々な御意見をいただいて、それを熊本の政策として実現しているところであります。分野はいろいろありますけれども、本日の会議は、「夢のある教育」の実現に向けて」というテーマで意見交換をお願いしたいと思います。私のマニフェストでは、3つの困難（財政再建、川辺川ダム問題、水俣病問題）、これを乗り越えて、4つの夢を実現しようとしています。それは、稼げる県くまもと、品格あるくまもとづくり、長寿を恐れない社会をつくること、そして最も重要な問題として、夢のある教育を実現しようと思っておりました。その中で、今日は夢のある教育に絞って、皆さんの御意見をうかがいたいと思っています。

今、先行きが大変不透明です。このような時代だからこそ、子どもたちの可能性を伸ばして「生きる力」をはぐくむ必要があると考えています。教育は、夢の発見であり、挑戦であり、夢の実現であるというふうに思います。そういう意味で、教育はひとりひとりの夢への架け橋ではないかなと思っています。この夢はどこからくるかと、いろんなかたちで夢が湧いてくるわけですがけれども、私自身の場合で言えば、小中高とたくさんの本を読み、いくつかの夢を抱いていました。そして、その夢に向かって邁進して、ひとつずつ夢を実現していきたいと考えて、生きて参りました。その自分の経験から、夢を持つ大切さを実感しております。そこで、夢のある教育を実現するために、何が求め

られているのか、さまざまな角度から御意見をいただきたいと思っています。テーマに関連した県の取組みを参考資料2として、指標やアンケート結果を資料3としてお配りしておりますので、そちらもご参考にいただければ幸いです。

指名するわけではございませんけれども、小栗委員から順に全員に一通り、このテーマについて意見や議論をしていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

【小栗委員】

それでは、最初に御指名いただきました、小栗でございます。このテーマをいただいた時に、教育の現況について、もっとしっかりと勉強しないといけないということで勉強させていただきました。夢のある教育ということで考えてみますと、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、それぞれのステップで、学校、家庭、社会が子どもたちの描くことができる夢の対象範囲を広げて、基礎学力を身に付けさせ、多くのことを経験させることと、また、的確な判断力ができるような力を涵養することが非常に必要だと思います。大人の感覚でなく、子どもが自ら感性を磨き可能性を探らせる、そして夢を描くことができるように手助けすることが求められると思います。

そういうことで、私もいろいろと教育について、現状、問題点、課題等いろいろ勉強させていただきましたが、特に「くまもとの夢4カ年戦略」で、現状と課題というのがありました。そこに、ひとつは地域コミュニティの衰退という地域における魅力、子育て力が低下しているということと、それから少子化や核家族の増加で、家庭の教育力や子育てする力が低下していることが懸念されるということが指摘されておりました。教育というものを大きく分けると、一つは家庭教育であり、二つめは学校教育であり、三つめは社会教育。この三つに分けられるのではないかと思います。そして、この三つの教育が連携、協力するための仕組みづくりで、教育の相乗効果を上げていくということが現在問われている。この仕組みづくりに基づいて、夢を実現させていくということではないかと思えます。

特に、私は、家庭教育は全ての教育の出発点だと考えております。保護者の子ども教育の役割は、大変重要であると思います。これを具体的に、施策で、先ほど参考事例を見させていただきますと、「くまもと家庭教育十か条」というのが、教育における家庭の役割と責任についての啓発ということが書かれていますし、また、保護者を対象として、家庭の役割と責任について積極的な啓発や支援活動を行っていらっしゃるということで、ぜひこれは、地道な努力だと思いますけれども、継続的に活動をお願いしたいと思います。

また、学校教育については、幼稚園から大学までそれぞれの過程で進められているわけですが、先ほど知事がおっしゃいました生きる力をはぐくむということについて。私も最初、この生きる力というのは、どういうことか教育関係者の方にお聞きしたら、学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会答申で、「生きる力」とは、社会人になった時、社会人としてどういう力を備えなければいけないかということが明記されておりました。これがまさに、今回の生きる力として、基礎知識をはじめとして、そういう知識をしっかりと各段階で教えこんでいくということが、非常に必要だと思います。現実にそれに基づいて教育を進められていると思いますから、現に中央教育審議会答申が

出たのがつい最近だったと思うのですが、20年の1月ですね。ですから、これを具体的に施策として展開していくのはこれからだと思いますけれども、ぜひこれを定着化していくようお願いしたいと思います。

それから、もうひとつの社会的な取組みの仕組みづくりである社会教育についても、県は学習環境づくり、自ら学習する環境をつくって推し進めていくという方針がここに書かれていますが、ぜひそれを強力に推進していただきたいと思います。

そういうことで、いろいろ考えますと、やはり教育というのは学校だけではなく、家庭と学校と社会が一体となってやっていくということ。特に地域社会での関わりでは、いろんなかたちで、ボランティアが非常に活動していらっしゃるということは、いろいろと私も耳にしていたし、現実にもそういうお話を聞いたのですが、やはりそこだけでは足りなくて、それを組織化するなりして、きちっとコーディネートをして、そしてそれに基づいて、例えば学校サイドで、こういう人がとか、先生方が要望した時に、きちんと対応できるような体制整備をやっていく必要があるのではないかと思います。

それからもうひとつ、中央教育審議会答申の中で、「教師が子供たちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備等」という項目があるのですが、いろいろな学校にサポートしにいくと、先生がものすごく忙しいということを聞くんですね。僕は、先生が忙しいというイメージは最初分からなかったのですが、やっぱりいろいろな方に聞くと、皆さん忙しいとおっしゃる。現場の最前線をどうやって強くするかという時に、先生が生徒にきちんと対面し指導できる、そういう体制が私は非常に必要ではないかと思います。そうした時に、インフラづくりをきちんとやっていかなければいけないのではないかと思います。ぜひこのところを、専門家の方々が今日もいらっしゃると思いますけれども、教師の立場に立って、一体何がそんなに忙しいのか、それをどうやったら効率的な活動ができるのかということ、ぜひ考えていただきたいと思います。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、崎元委員お願いします。

【崎元委員】

崎元です。私も、一応教育に携わってきたものですが、教育の話というのは、百人寄れば百の意見が出るだろうと思うのですが、少し違う観点から、学生たちと付き合っていて特に感じたことのひとつとして申し上げたいと思うのですが、生きる力をはぐくむ前に必要なことがあり、それを十分には獲得していない学生が多いということなんですね。その答えは基本的には、生まれてから死ぬまで一生を通じて継続的に学ぶ、あるいは継続的に学ばせる原動力ですね、それと学ぶ方向性。それを各人が持てば、もうそれで教育問題の大部分は解決するというふうに思っています。すなわち、生きる力をはぐくむ前に必要なことというのは、生きる原動力と方向性だと思っています。生きる力の前に、生きるための原動力とよりよく生きるための力、これを私は個人的に根源力というふうに名前をつけているんですけど、この二つが必要です。生きる力というのは、いわゆるカリキュラム上の学力と忍耐力、交渉力、コミュニケーション力などいろいろありますけれ

ども、そういう学力以外の人間力、この二つを併せて、生きる力というふうに考えたらいいと思うのです。それを、教育で養成するというひとつの目的があるということを否定するわけではありませんけれども。教育の本来の目的というのは、先ほど申し上げたように、自らの目標のもとに自己を実現し、幸せになる、あるいは、社会の幸せに貢献するために生涯を通じて継続的に学習する力を養成するということに教育の目的があるのではないかと思います。

生きるための原動力というのは、いろいろあると思います。なんで生きているのかということを考えれば、食欲とか性欲とか、欲というものがありますよね。性欲に関して言えば、私自身にとっても、若い頃はやはり、異性の存在というのは、ある種生きる原動力になりました。それから、名誉とか金銭とかそういう所有欲、生命欲。それから、劣等感からの解放というのは、これは大きい力になりますね。例えば世界チャンピオンになったボクサーのお話を聞いていても、「私はこういう劣等感から脱出するために頑張ったんだ。」というふうに言われる人もおりますし、もう古いのかも分かりませんが、矢沢永吉という歌手がいますけれども、彼も、もともと劣等感の塊であって、そこから抜け出すために努力してあれだけの大歌手になったというふうに言っています。それから、幼年における刷り込みとか、こうあらねばならないという強迫観念とか義務感とか。それから、最近の若い人にとっては、優越願望といいますか、かっこよくありたいという気持ちがあります、これもひとつの原動力だと思いますし、向上心、競争心、あるいは惨めになりたくないという自尊心の確保。それから、私も共感を持つのですけれども、ある程度年をとりますと、人生に対するあきらめ、諦観といいますか、あきらめから開き直って、すごいことを成し遂げる人もいます。例えば東京大学の建築の教授で、安藤忠雄先生という方がいます、新熊本駅のデザインもしていただいている有名な建築家ですけれども、安藤忠雄先生も、人生のあきらめから開き直って、やり始めたということを自分の回顧録の本で書いておられます。インドを放浪している時に、そういうことに思い当たったということを言っています。最近の若い諸君は、やはり、こういう生きるための原動力を獲得しえてない方が多いように思われるので、そういう生きるための原動力を早く得てほしいというのがひとつです。

もうひとつの力が、根源力というふうに先ほど私申し上げました、よりよく生きるための力です。これは、例えば、知的好奇心とか、モノや事を創造したいという思う心とか、先ほど知事がおっしゃいました、夢をはぐくみ実現しようとする志とか、新しいことにチャレンジしようとする気持ちとか、あるいは、社会や人を幸せに導こうとする心、あるいは社会正義、今流行りの言葉では、共通善という言葉がありますが、そういう共通善を実現しようとする志、そういう方向付けをする、よりよく生きるための力、これを見つけてほしいと思います。そういう根源力を呼び覚まして植えつけることに成功することが、教育の真の目標であろうというふうに思います。

したがって、以上をまとめますと、人間の活動、生きることは、人間が本来持っている欲求とか、体験により備わる自尊心の確保とか、そういう意思、そういう原動力を推進力として、知的好奇心、あるいはモノや事を創造したいという心、夢をはぐくんで実現しようとする志、人と自分を幸せにしようとする心などという根源力によってより良い方向に高められ、最後に学力と人間力により実施、達成されると考えています。学力や人間力を養成する前に、原動力、根源力を呼び起こすために

必要なことが、今求められているのではないかと、学生と付き合っただけでそう思うことが度々ございました。そのためには具体的にどうすればいいかという話は、次にマイクが回ってきた時に、お話ししたいと思います。

【蒲島議長】

どうもありがとうございました。それでは、田中委員よろしくお願ひします。

【田中委員】

私は最近、東京の親族に不幸がありまして、この会議には出席できないのではないかと、意見書(※)を提出しました。幸か不幸か出席可能となりました訳ですが、添付されている意見書に沿って申し上げます。

1番に書いてあります文芸春秋の7月号というのが、確かこれは小栗さんが、「同級生交歓」に写真に出ている号ではないかと思ひますけれども、これで例の藤原正彦さんが、いくつか指摘しています。これは全く、同感と思ひます。要するに、日本の学生なり生徒の学力が、年を追うごとに落ちていくということです。中に書いてありますように、アメリカに留学する留学生は、いまや中国や韓国のほうが、日本人よりはるかに多くいるといったようなこと。あるいは、もちろん藤原さんの指摘ですけれども、もし戦争が起こった場合に、自分の国を守るために立ち上がるかということについては、日本人はもうほんとに否定的でございます。たった15%の人が立ち上がると言ひますし、韓国は74%、中国は9割の人が。こういふことで、愛国心が全くなくなっておりますね。

2番に書いてありますように、OECD各国の生徒の学習到達度調査というのがあるんだそうですが、この数字を見ても、特に「数学的リテラシー」で落ちていくということが、数字として出ております。

教育の場合、私は特に思ひますが、鉄は熱いうちに打てということで、小学生、中学生の教育が非常に大事だと思ひますね。3番に、公立の小中学校の教職員について書いてありますが、これは福岡県のです。私は、福岡県にずっと関係してたもので、福岡県の数字が出ていますけれども、平成22年と平成17年、5年間の数字を比べてみますと、教員の数は相対としては増えているんです。生徒数は、たぶん少子高齢化で減っているにも関わらず、教員の数、あるいは教職員の数は増えているんですね。しかしながら、正規の職員、教員は減っているんですね。それを臨時、あるいは講師という格好で補充し、増員している。つまり、皆さんご存知でないかもしれませんが、義務教育の教員の給与は、たぶん3分の2は国がもっている。残りの3分の1は県が負担している。だから、熊本市立小学校といった場合の先生方の給与は、熊本市は一切負担していないんです。あれは、国と県がもっている。そういうことで、非常に、国の干渉は多いのだと思ひます。ということで、国の総務省が、5、6年前ですか、行政改革推進法で、生徒数が減った分だけ先生は減らせよという法律ができてはいるんですが、一方、文部科学省は、逆に、教育に支障がないようにしろよという通達を出した。したがって、県の教育委員会は、たぶん教職員は、正規の数は減らしているけれども、臨時職員、あるいは講師ということで、県の負担かなんかで増やしている。実際増えて

いるんです。福岡県の場合ですよ。熊本県はどうか知りませんがたぶん同じじゃないかと思うんです。そういうことではありますが、これがひとつ。

それからもうひとつ、(2)で書いていますが、これは、私の経験といいますか見聞ですけど、小栗さんもおっしゃったけど、部活の指導をやっている先生。これは極めて忙しくて、私の親類にも一人います。高等学校の野球部の監督をやっておるとかですね、中学校のバレーの指導をやっているという先生方は、土曜日も日曜日も働いていますね。しかし、一方で何もしていない先生もいるんです。暇な先生もいるわけです。これは、福岡県の場合ですよ、熊本県の場合は、詳しく知らないから。これは何かというと、県の職員の方にも言えるかもしれませんが、勤務評価というのが、極めてお粗末というかほとんど給与に反映していないですね。働いても働かなくても、受け取る給与、ボーナスなどは同じ。民間会社は、極めて査定が厳しく、勤務評価制度が確立しています。県職員、特に先生方は、要するに、悪平等になっているというのが私の見聞になります。

そこで、これは提言になりますけれども、ひとつ熊本県は、率先して適正な正規の先生を確保するんだということは大事だと思います。しかし、多ければ多いほどいいってことではないんですね。今は、ほとんど、たぶん、実質的には30人学級、ほんとは40人学級だけど、いろんな理由で30人学級がほとんどもう実現していると思います。数じゃなくて、先生の質だと思いますね。そういうことで、少数精鋭が望ましいと思います。それから、もうひとつは、先ほど申しあげた実質的な勤務評価制度。これは非常に大事だと思います。これは、やる気のある先生、教職員のモラル(morale=勤労意欲)の向上、モラルでなくてモラルですけど、モラルの向上をぜひ確保してもらいたい。それから、もうひとつ、給与とか人件費は、そういうことで国と県がもっておりますけど、校舎とか施設の整備は、たぶん市町村なり、それぞれの市立なら市が負担しているんだと思います。そういうことで、国の法律なり、行政指導、通達にとらわれない教育特区的なですね、そういう発想をもって、検討されたらどうかというのが私の意見であります。とにかく、この紙に書いたとおりです。

(※)別紙 意見書参照

【蒲島議長】

ありがとうございました。橋田さんの方からお願いします。

【橋田委員】

私は、教育が非常に大切であるということは、本当にその通りだと思っております。あらゆる方々が教育についての理想的なお話をされます。私は、その中で最も大切なことは、実施することであると考えています。何を実施するのかわか、様々な目的があると思いますが、それを如何に強力に実施していくかという体制づくりが重要です。例えば、予算措置もそうですし、社会的にそういうことができるような体制をつくるなど。もう、こうした方が良いという話は、概ね出尽くしていると思いますので、是非これをやろうということで、できるものから取組んで頂きたいと思います。では具体的に、何をやればいいのかということですが、その前提に、まず認識として「三つ子の魂百まで」

と言いますか、私どもは、いつも幼児期における体験なり、教育が一番大切だと言われて育ってきました。子どもの頃には、動植物に対する、あるいは虫に対する、草花もそうですが、優しさであるとか、愛情であるとか、そういうものをとにかく身につけさせるような何をやるべきかです。私どもが子どもの頃は、おじいちゃんやおばあちゃん、あるいは隣近所のおじいちゃん、おばあちゃんの影響がとても強くあったように感じます。日本の歌謡曲の中で、「孫」という歌がありますが、その歌をよく聞いてみると、とにかく自分の孫がかわいいのです。昔は、そうではなくて、隣近所のいわゆる他人の孫とも遊んだり、教えたり、叱ったりしたと思います。核家族化・少子高齢化などの影響なのか、残念ながら、そういった繋がりが非常に薄れたように感じます。出来れば行政として、お年寄りの知恵と子どもたちをお互いに交わらせて遊ばせる幼老共生の場を提供することなどを考えて頂けないかと思います。

次に、小学生くらいの子どもになりますが、遊ぶということが非常に大切だと思います。やはり私どもは、遊びの中を通して、クリエイティブなことを学んできました。特に、自分たちのことを顧みると、ガキ大将みたいな兄ちゃんがいて近所の子どもを集めて遊ぶ。その時に、ガキ大将になってリーダーシップをとろうとすると、創造力がたくましく、同じ遊びでも飽きない遊びを考えだして、年下の子どもを引き連れて遊ぶ。そういうことを続けることができないと、リーダーシップをとっていけない。例えばチャンバラごっこをするなり、ターザンごっこをするなり、いずれにしても、遊びの中から多くを学びました。したがって、遊びの大切さであるとか、工夫やクリエイティブなことをするという、教育の大切さはあると確信しております。

現在、私は福岡で、保育園と幼稚園の相撲大会の会長を務めており、創立10年くらいになります。これは相撲をすることによって、礼儀作法とか、相手を思いやる心をはぐくもうということで始めたものです。相撲は国技であり、きちっとした教えや礼儀作法もあります。4歳、5歳、6歳の男女混合で、保育園の対抗戦。毎年すごく盛り上がります。まず親子が一体となり、保育園、幼稚園の保母さんたちが、子どもたちに一生懸命訓練をさせ、幼稚園の名誉を担って戦うのです。その時の子どもたちの顔を見ているとすごく輝いています。特に男の子が女の子に投げ飛ばされると、泣いて悔しがります。土俵上で立ち合うということは、お互いの呼吸が合わないと出来ませんので、相手を思いやる心というのは、自然に出来てくるわけです。それから勝負がつき、負けた子に手を差し伸べる。負けた子は、悔しさをバネにしてまた頑張る。そこですごく大切なものを学んでいると思うのです。日々、相撲部の方々が、礼儀作法を徹底的に教えています。将来、思いやりのある強い大人になっている彼等に会うのを待ち遠しく感じます。

中学、高校になってくると、学問も重要な時期でしょうが、クラブ活動が果たす役割は非常に大きいと考えます。それを通して、心身が鍛錬され絆も深まりますし、苦楽をともにした仲間は生涯の財産となります。特に高校生は、相当大人になっており、ある意味では、団体生活なんかに対するクールな目を持つ高校生もいますが、私の母校は修猷館ですが、昔から大運動会というものを徹底的にさせます。現在も続いておりましたが、1年から3年までを4つのブロックに分けて、数ヶ月前からその準備に取り掛かり大スタンドもつくる。中でも盛り上がるのが、応援合戦・棒倒し・川中島。普通は怪我をするということで、父兄から反対され、危険な種目はしない高校もあるようで

すが、私の母校の場合は、今でもそれを徹底的にさせております。最近、自分の中で若干の違和感があるのは、男女同数のなか、大体女性の応援団長が仕切るのです。応援リーダーとして女性が大声を張り上げ、活を入れたり応援歌を歌ったりするのです。男女一体となり、応援歌の合唱光景を見ると、女性も男性もみんな腕を後ろに組んで、背を後ろにぐっと反らし張り裂けんばかりの声を出して歌う。最終的には、4チームの中から優勝チームが選ばれるわけですが、その時はみんな涙して、これまでやってきた成果をお互いに称え、喜びあい、すごい団結心というか、そういうものができていると確信します。青春時代の心に残る良い思い出になり卒業していくようです。やはり高校時代に何かに熱中し、チームワークをつくっていく。そういう教育が少し欠けているのではないかと思います。また、教育現場で残念な部分は、子どもたちにもやや態度が不遜なところもあるので、一部の先生方に諦めの雰囲気があることです。滅多に授業参観に行くことはありませんが、見せていただくと授業風景は、学生は殆ど教師を教師とっていないような態度で授業を受けている、一方で教師はそれを叱ることもなく放置するなど、荒廃した教育現場もあるようです。

柔道の古賀稔彦選手のお兄さんも柔道の大家ですが、修猷館高等学校で15年間、現在は糸島高校で柔道の先生をしています。彼といろいろ話をする機会があり、聞いてみますと、高校の教育現場は本当に酷いですから、良いか悪いかは別として、自分ほとんどない学生は遠慮なく叱ると言っていました。しかし、一度も父兄から苦情が出たり、怒られたり、問題になったことはありません。察するに、教師の心意気と学生たちの繋がりみたいなもので、愛情があれば必ずしもスパルタ教育が間違っていると思えない気がします。そういう意味で、心身を共に鍛える、精神力を鍛えるということは、高校くらいまでは重要であると痛感しています。

福岡で実施している具体的なことをもう少し披露しますと、まず小学校と中学校の低学年を対象とした寺子屋教室というのを、ボランティア・民間で行っています。これは、寺子屋教室を巡回して教えているもので、その殆どは「世界の偉人」というものをテーマにし、西郷隆盛が出てくれば、秀吉、家康も出てくる。アレキサンダーも、ジンギスカンも出てくるというもので、特に夏休みは親子を対象に教室を開いて指導しています。

それから、もう7年になりますが、中学生を対象として、全国から選抜した男女90名ずつくらいの180名で「次世代リーダー養成塾」というものを実施しています。これは、8日間くらいの合宿教育なのですが、全国から宗像のグローバルアリーナに集め、朝から晩まで合宿で教育をしています。教育にお見えになる先生方は、日本を代表する、あるいは世界を代表するようないろんな文化活動、政治活動、教育活動に従事した先生方です。この子たちがメールや同期会などで、とても良いネットワークを構築しています。なお、この将来のリーダーを養成する「次世代リーダー養成塾」には、福岡の経済界が毎年2,000万円の資金供給をしております。

それから、これも経済界で毎年3,000万円くらいのお金を拠出してありますが、各中堅層を対象にリーダーを養成するという「九州アジア経営塾」という塾をしております。土日の隔週で教育を行うのですが、非常に著名な先生方を講師に迎え、年間230時間。何が言いたいかといいますと、やはり官と民が、あるいは産学官、産業界、学校、官が一体となって、次の世代を担うリーダーを

意図的に継続的につくっていくというような部分も必要ですし、全体のレベルを上げていくことも必要。いろいろ役割分担を考えながらバランスよく育てていくことが必要だと認識しております。

そして、スポーツ。武道をはじめ、心身の鍛錬をするということを、ぜひ熊本県でも取組んで頂ければと存じます。そのために、産業界も協力をしていく必要があると思います。今春、早稲田大学が佐賀の地に、男女共学、中高一貫の学校をつくりました。資金は、九州電力が20億円を出し、我々も少しお手伝いしました。既に、開校し中学・高校の各1年生が授業開始となりました。福岡を中心として、九州隣県と関東方面からも生徒が来ており、3分の2くらいが、寮で一緒に生活をしています。先日、授業風景を見にいきました。3学級を見に行きまして、数学と社会と国語の授業を見ましたら、私が最近の中高等学校を見た風景とは全く様変わった、素晴らしい授業風景でした。子どもたちの熱心さもさることながら、教師と一体となっており、非常に感激を覚えるとともに、この環境で中高一貫6年間、唐津の城下町で育ったなら、素晴らしい子どもたちになると思いました。校庭には、わざわざ甲子園と同じ土を持ってきて敷いてありました。「何故ですか」と聞きましたら、「甲子園に出ることを目標として、野球の練習をする」とかえってきました。今から何年かかって甲子園に出るのかなと思いましたが、それはやはり夢であり、希望であるのかなと思いましたが、少し長くなりましたけど、以上実例をご紹介いたしました。熊本のデータを少し見せてもらいましたが、若干進学率が足りないようです。しかし、一番大切なのは、志。やはり、志の教育が小さい時から大きくなるまで、そして社会人になっても、いくつになっても本当に大切だと思うのです。

【蒲島議長】

ありがとうございます。それでは細川委員のほうから。

【細川委員】

私は、前回からこの委員会に参加させていただいておりまして、まだまだ皆様のお仲間の中では、新米でございます。今日は教育を中心に、何か意見をということで、前もって送付していただきました資料をさっと拝見したんですけれど。率直な感想でございますけれども、この中に、どう考えても障がい者の視点というのは全くない。特別支援教育というところにだけ、出てくる。しかし、社会というのは、全ての地域社会は数%の障がい者がおられます。私自身も、19年前までは、健常者を中心とした社会の中でしか暮らしてきませんでしたから、障がい者というのは別の人たちという思いでおりまして、福祉という分野は行政にお任せという感じで、私とはちょっと関係ない人たちと壁をつくっておりました。ところが、19年前にスペシャルオリンピックスという活動に出会い、この活動を広めて、現在は全国47都道府県で、8,000人近い知的障がいのある方たちが、年間を通して日々楽しくスポーツ、トレーニングをしております。それをほぼ100%ボランティアが支えているという組織を、ほんとに熊本からゼロからつくりました。先ほどから、教育の夢の話があります。子どもたちがもっともって夢を抱けるように。ところが、19年前の頃、知的障がいのある人たち本人、また家族にとって、夢なんかほとんどない時代でございました。しかし、このスポーツの活動を通して、ほとんどの親御さんがおっしゃるのは、「もう、奇跡だ。」とおっしゃったり、「この子に、こ

れだけのことができるようになるなんて、ほんとに夢みたい。全国大会に出たり、世界大会に出場したりして、こんなことが実現するなんてほんとに夢のようだ。」という親御さんの言葉をどれだけきいたか分かりません。そういう障がいのある方たちに夢を与えることができたスペシャルオリンピックですけども、この中の何人の方が、このスペシャルオリンピックがなぜそんなことができるかということをつかれない方もおられると思いますので少し話します。

オリンピック、パラリンピックと並んでスペシャルオリンピックも同じオリンピックと名前がついています。パラリンピックは体の一部に障がいのある方たちが選手として出場しますが、スペシャルオリンピックの場合は、分かりやすく申しますと、知的発達障がいの方たちがアスリートとして参加するスポーツ、競技会なんです。オリンピック、パラリンピックのように、世界大会、スポーツの祭典だけをしている団体じゃないんですね。日常的に、年間を通して、いつも彼らにスポーツ活動を提供しているボランティア団体なんですね。そこがすごく違うことで、日々、世界中でやっていますし、トレーニングだけでなく競技会は熊本なら熊本の地区大会、時には、九州地区大会、そして2年おきには必ず全国大会を開いていますし、そのまた間の2年おきには、必ず世界のどこかで世界大会に日本から選手が参加している。年から年中、180の国で、しかも300万人くらいのアスリートの方たちが毎日活動しているということで、私たちのオリンピックは最後に複数形のSがついて、スペシャルオリンピックと大変分かりやすいと思います。そこが、オリンピック、パラリンピックと全く違うところです。さらに違うことは、競争主義ではないということでございます。世界のナンバーワンになることより、世界のオンリーワンを大切にしている考え方だということ。それから、真の勝利者は、自分の目標、自分の可能性に向かって、勇気を持って挑戦し、途中で決してあきらめずに、最後までベストをつくした人であるということ。ですから、予選を勝ち抜いていって、勝ち残って、最後の決勝で1位になる金メダルを目指すわけではなく、世界のナンバーワンでなくオンリーワンです。ですから、どういう人が1位になるかといいますと、予選で落ちる選手が全く一人もいなくて、全員決勝に出ます。つまり予選は、クラス分けのための予選です。ですから、たくさんのクラスができて、そのクラスごとに、決勝が行われますので、全ての選手に勝利のチャンスを与える。そして、一クラスは8人以下と決まっていますから、一番ビリでも8位です。ですから、表彰台は8位まで用意されて、ビリだったら8位のところに立たせてもらって、8位という賞をもらう。つまり、人に勝つことよりもっと大事なことは、昨日の自分に勝つことである、これが私どもの理念です

このように、ナンバーワンよりオンリーワン、人に勝つことより昨日の自分に勝つこと。また、あきらめずに最後まで努力をするということ、結果よりその過程が一番大事だという、こういう価値観で全ての活動が行われているという大変ユニークなスポーツ団体です。実は、この価値観は日本にない価値観でございました。もちろん、競争主義、経済第一、そこでごんばって能率主義、効率主義もよろしいですけれども、それだと負け組が本当に救われる場所がない日本の国だと。一番役に立たない障がい者は、何の役にも立たないから、福祉の世界に閉じ込めて隔離してしまった。これが結論だったと思います。それも、何にも不思議に思わずに私は50年生きてきました。ところが、スペシャルオリンピックに出会って、まったく目が覚めるような、新しい価値観に出会って、こういう価値観も日本に必要だということを感じまして、スペシャルオリンピックの活動を始めたわ

けでございます。私が生きてきた50年間の人生の中で学んだことよりも、それから19年間で知的障がいの方たちとの触れ合いの中から学んだことのほうが、私にとってどれだけ素晴らしいものを学んだか、これは体験したものでないと分からないと思います。一番この世で大切なこと、ひとりひとりの人間がどんなに素晴らしい存在かということ。みんな違っていいんです。その違っていいことの素晴らしさ、ひとりひとりの命の尊さ。人間の尊厳とかそういうことは、口で言うことはたやすいんです。しかし、それがどういうことかは、私は分からないで生きてきました。しかし、障がいのある方たちと触れ合うことによって、人間の尊厳とか、ひとりひとりの命の尊さ、心の中にじわっとありがたく感動を受けるように私は育ててもらったんです。生きるということの意味、人間が一番求めている何のために生きるのか、幸せって何だと、そういうほんとはただ議論だけで何にもならないこと、それを本当にこの人たちから私は学びました。ですから、私はこういう障がいのある方たちが、地域社会で主役になる、当たり前で地域社会のどこにでも参加できるそういう国にしたい。これが私の夢でございます。設立からもう19年も立って、このスペシャルオリンピックスの活動は日本中に広まりました。しかし、残念ながら、選手は8,000人ですけれども、参加しているボランティアはその倍でございます。それに、少し関わっている人を入れても数万人でございます。それだけでは、なかなか日本の社会は変わりません。私自身、ここまできましたので、理事長はひきましたけれども、今ほんとに目指している夢は、障がいのある方たちが当たり前で普通に地域社会に参加している。共に学び、共に遊び、共に暮らし、そして働いている。それを当たり前と周りの地域の人たちが受け入れる、そんな社会をつくるにはどうしたらいいかということで、あらゆる実践を行っております。ようやく遅まきながら、今年の春から熊本でこの実践活動を始めたところでございます。どんな活動をしているかというのは、第2ラウンドでお話させていただくということで、とりあえず一番の基本の私の夢をお話させていただきました。

【蒲島議長】

ありがとうございました。では、松島さん。

【松島委員】

最近、相次いで、毎年のように政府から成長戦略というのが出るわけですが、私ははっきりいって、信じていないんです。なぜ信じていないかというと、どんなにいい戦略があっても、それを誰が実行するのか。戦略があっても、優秀な人材がいなければ、それを実行されることにはならないわけでありまして。ところが、成長戦略を見ても、ほとんど人材については触れていないわけです。せいぜい一行か二行、触れていてもそれくらいしかない。こういう人材をいかにして育てるかということについての言及のない成長戦略というのは成長戦略ではなくて、単なる景気対策ではないかというふうに思っています。蒲島知事もいらっしゃいますけれども、政治家の方は往々にして、教育というのは大切だけれども、少なくとも20年くらいたないと効果は出てこない。ですから、アジェンダになかなかしないわけでありまして。しかし、それだけの時間をかけて教育の効果を出す、それが成長戦略の根底ではないかなと思うわけです。実際に、バブルが破裂してからもう20年経

っているわけでありませう。バブルが破裂した時に、新しい教育に力を本当に入れていれれば、もうその子どもたちは大学生になっているわけでありませう。ですから、教育ということ、本当に、一刻も早く現場も含めて改めて改善していく必要があるのではないかとこのように思ひます。日本全体を見ましても、ほんとに日本が世界に誇れる資源というの、人材だらうと思ひます。その人材を生かすも殺すも教育であらう。そういう点から、ぜひこの教育のことを考えていただきたいと思ひます。

そういうことで、県が用意していただいた資料もいろいろと読ませてもらいました。いろいろな改善もされていると思ひます。いろいろといい方向に進んでいると思ひます。でも、私の今申し上げたような視点からすれば、もっとももっとも気合を入れて、もっとも情熱をかけていただきたいなというように思ひます。これでも、見ておひますと、やはり標準偏差的な、外形基準みたいなところになんかウエイトがかかっているような感じもしますし、そういうところで教育の評価をしすぎているのではないかなという気もいたします。例えば、大学の進学率。大学の進学率自体を問題にする時代はとうに過ぎているのではないかなと。大学に入っ、いかに学んでいかに出るのが問題です。今は、大学に入っ後は遊んでいて、でも出られるということが問題なのです。例えばそういうメルクマール(merkmal=指標)をとるにしても、もっと実態を反映したようなメルクマールで評価していかないと、非常に形骸的な教育の内容評価になってしまうのではないかなと思ひます。

第2ラウンドで具体的な話をしたいと思ひますけれども、その前に、二点だけ言っておきたいと思ひます。夢のある教育の実現にということですが、その視点を見ますと、確かな学力の向上というのが第一にきていっているわけです。ここでおそらく議論されている対象は中学生、高校生、あるいは小学生だと思ひます。彼らの世代にとって、重要なのは三位一体でバランスよく教育するということ。ひとつは、学力というよりも知力、知見と申しませうか、あるいは教養というか、あるいはインテリジェンス。二番目は、身体能力、スポーツ、健康、スポーツマンシップ。三番目は、感性とか情感とか、アートを愛し、自分なりにそれを解する心。こういうものを、やっぱり三位一体でバランスよく、教育していくことが必要ではないかなと思ひます。

それから、教育そのものから離れるかもしれませんけれども、幕末から明治時代初期に、日本に訪れた外国人の日本人に対する印象、感想というのを読んでみますと、日本人といつてもほとんど庶民のところを私は申し上げていっているわけですが、庶民に対しては批判的な意見もございませんけれども、かなりの方が日本の普通の庶民が非常に優れた特質、心性、心の持ち方、あるいは徳目を持っていると言ひます。第一番目は非常に親切で正直である。二番目は礼儀正しく、思いやりがある。それから三番目は、快活で明るく、好奇心に満ちて生き生きとしているというような評価が続くわけです。これは、幕末から明治の初めの頃ですから、工業化が起きる前の日本人の庶民の特性だらうと思ひます。その工業化を経ていますので、その当時の徳目が、現在も生きていする必要はないかもしれません。しかし、本来的に日本人は、そういう良い素質をたくさん持っているわけです。工業化をうけても、そういう良いものは引き続き維持していく必要がある。失ったものは取り戻す必要がある。これは、学校だけではなくて、家庭も、地域も、企業もいろんな人が手を支えていかなければ、こういう徳目を維持したり、あるいは回復させたりすることはできないというふ

うに思いますけれども。では、学校で何ができるのか、そういう点で考えまして、やっぱり最小限、学校では、美しい言葉、穏やかな言葉できちんとお互いにコミュニケーションできる、お互い思いの丈を述べられるようにしていただきたい。美しい言葉、穏やかな言葉というのは、別に標準語でなくても良いわけで、熊本弁なら熊本弁でも十分良いわけです。やっぱり挨拶でも、御礼でも、謝るでも、そういう言葉を口に出していくということが、そういう徳目の涵養というものにつながっていくのではないかというふうに思います。教育の現場としては、ぜひ美しい言葉ということを教えていただきたいと思います。橋田委員から、いろいろと御託を並べる時ではなく、実施だというお話がございましたので、後ほど我々が東京で実施していることについて申し上げたいと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございました。これで、一巡しましたけれども、本日御欠席の方から御意見をいただいておりますので、事務局のほうから紹介をしてください。

【事務局】

それでは、本日御欠席の方々から提出いただいております御意見を紹介させていただきます。お手元の資料9ページになります。全文そのまま読み上げます。

◆姜尚中委員

① 成人生涯教育の実現に向けて

大学やその他の高等教育機関とタイアップし、多彩な県民講座やカルチャーセンターを開催してはどうか。

② ①と関連して「熊本再発見」のツアーとプログラムを計画し、講師に内外の多彩な識者などを配したイベントを開催。旅行代理店ともタイアップ。

③ 熊本の歴史、伝統、食と農などをテーマにした課外授業のプログラムを積極的に導入し、小・中学校生から実際に自分たちで農作物を作るカリキュラムを組織的に導入し、広い意味での「実物教育」あるいは広義の総合的な「生活科」を実施する。

以上のようなアイデアをご検討いただきたい。

◆斉藤惇委員

長い歴史の中でどういう国が国家、国民共に繁栄し、どのような国がどのような理由で衰退し、停滞しているかを検証すれば、教育のあり方ややり方が明確になる。個人的「べき論」や理想的「あるべき論」ではなく人間、民族が生きた様を物証として参考にすれば、英国、米国、中国、韓国、ロシア、フランス、ドイツなどにおいて如何に厳しい初期教育<基礎知識教育>体力、胆力増強(主にスポーツによって)が行われているかが明白である。特に英国私学校における教育のしつけ、学力の徹底的教育は日本では全く見られないものである。

基本的には江戸、明治、大正期において日本に導入されてきた教育システムの復活が望

ましい。

基礎学力、国際的知見、体力のない人間に「豊かな心」「やさしさ」を求めても夢物語にすぎない。

教育は幾百年にわたって国家を構築する力である。一時的には、一部の人間の勝手な情緒的価値観で「ゆとり」などと語るべきではない。彼らにその失敗の責任をとる時間も気持ちも存在しないのだから。

◆坂東真理子委員

小、中、高で基礎的な学力、社会的なルールを身につけていないまま、高校、大学に進学する子どもが多数います。教員だけで手が足りないならば、ティーチングアシスタント(TA)として地域の中・高齢者をもっと学校に関わってもらってはどうか。

中、高校生が現実の社会・職業にふれる機会(ボランティア)を一年に三日～七日間行うことにより将来のために準備をする。

アジアなど世界の国でホームステイをするなどの経験を与えるなど挑戦的なプログラムを実施してはいかがでしょうか。

以上です。

【蒲島議長】

はい、ありがとうございました。私も一言、言いたいのですけれども、時間が限られておりますので、それぞれあと5分ずつお話しいただいて、私に少しでも時間が残っていれば、一言、言わせていただきます。よろしく申し上げます。

【小栗委員】

それでは、先ほどいろいろ申し上げましたので、ほとんど私は言い尽くしたのですけれども。やっぱり、皆さんのお話しにしても、教育というのは、非常に発展の基盤であるということは、皆さんも認識していると思う。そして、なおかつ、様々な分野で活躍できる志の高い人材をどうやって育成していくかということが、ひとつは大事。

それからまた、細川委員のおっしゃったように障がい者も含めて、みんなが夢のあるような教育をきちんと仕立てていくということも、非常に大事だと私は思います。

また一方で、我々は企業人ですから、企業サイドから見ると、学校で教育されてきて、即企業に就職される方が8割くらいですかね、結構多いと思うのですけれども、やはりそこもある程度、就職した瞬間にギャップを感じないためにはですね、ぜひ現場サイド、教育サイドで、企業サイドも非常に努力しないといけないのですけれども、現実のどうにかたちでの企業が動いていて、それに対して、先ほどのお話の夢、もしくは自分の目的としてどういうとこに進みたいんだと。その専門性を、これからどうやって研ぎ澄ましていくんだという時に、小学校では基礎的知識なんですけれど

も、中学校、高校くらいで、一番青春期の時に、先ほどお話がございましたように、いろんな体験をしてですね、その中で、自分の夢、もしくは目的や、ある程度方向感を出していくような教育をしていただいて。それから、次のステップとして社会人になるのか大学に行くかによって、自分の専門性を高めていくというようなかたちの、ある程度ひとつの大きな枠組みの中で、やっていくということが大事でもあるし。そして私はやっぱり今の段階制、6・3・3・4というのが、果たしていいのかですね。むしろ僕は、中学校と高校は一緒にしたほうがずっと効率的かつ効果的な制度じゃないかという感じもする。現実、私立はそういうところが結構多いわけですから、そういうのも含めて、いろいろ制度的にも議論して。一部は、公立でもそういうかたちの試みがなされていると思いますけど。そういうことで、教育された方々が、社会人になった時に、さっきから生きる力として一体何が必要かと、教育で身につけていただくということが非常に大事ななと思います。以上です。

【崎元委員】

時間がないので、先ほどの答えを結論だけ申し上げますと、要するに、原動力とか夢を持たせるような根源力を呼び起こすためにどうすればいいかということなんです。列挙だけします。いろいろお話したいことはあるんですけども。どうして夢を呼び起こすことができるかということですね。これは、いろいろな先生方がトライされているんですけども、体系的な教育論というのはないと思います。今から申し上げることを、皆さまは当たり前のことだと思われるのだけれども、我々は今それを忘れていないのではないかと思います。

まず、ほめるということです。これはすごく効果がある。どんな人にも行動をおこさせる効果がある。それから、個性を伸ばすということです。好きなことを好きなだけやらせればいいと思います。少し極端ですけども、嫌なことはもう最低限にすることにして、どんどん好きなことをやらせる。それから、「なぜ」という言葉には丁寧に答えてあげる。それから、いろんなことを経験させ興味を刺激する、感動を与える、達成感、幸福感を経験させるということをやられていると思います。自動的に中学、高校を出て、なんとなくみんなが行くから大学に来たという人も多いんですね。そういう人といろいろ議論をするんですけども、「君は何に感動する？」という話をしたり、ああいうタレントがかっこいいとか、スポーツ選手がかっこいい、そうなりたいと思うのも原動力ですから、何かそういうものを見つけてほしいし、アルバイトとかボランティアとかいろんな経験を大学の間にするとか、哲学書を読むのも必要だし。先ほど、坂東委員の御意見にもありましたように、ぜひ、海外に放りだしてやろうということ、そして、ある程度限界の経験をするというようなことが、何かを見つける、生きる原動力なり根源力を見つけることになるのではないかと思います。

もうひとつ、話を変えますけれども、グローバル社会と教育ということで申し上げます。熊本には全ての分野の学部、学科の大学、高等教育がそろっています。今熊本の高等教育で、毎年約8,000名の卒業生を出しますけれども、語学、文学でなくて国際系の語学が、毎年約300名おります。熊本大学のコミュニケーション情報学科も含めて、まだ十分じゃないというふう思います。何が十分じゃないかという、少なくともそこまでくれば、授業は全て英語でやる。それから、一年間の海外留学を義務付けるというようなところまで、やっていただけないかと思います。ご存知の方も

多いと思いますが、秋田県の公立大学校法人の国際教養大学、ここではやっていることでありますし、APU(立命館アジア太平洋大学)も当然二ヶ国語教育をやっています。熊本の大学でもそこまで踏み込んだ国際化の教育をやってほしいと思います。最近、ユニクロとか楽天が社内公用語を英語にするとかニュースがありますように、あるいは、来年から新学習指導要領で、小学校5年、6年は国際活動というのが義務化されますから、そういう国際化に対応したことが少しずつ起こりますけれども、少なくとも今の熊本の高等教育についてそういうことを求めたいと思います。

もうひとつは、受け入れる留学生ですね、先ほど国家戦略プロジェクトの話もありましたけれども、30万人外へ出して、30万人受け入れるんだという話を政府がしています。しかし、何の財政的な裏づけもありませんから、松島委員が言われるようにあまり戦略にはなっていないんですけれども。2020年までに、30万人になると想定すると、今熊本の中の700人くらいの留学生、これが2,000人くらいになりますから、行政もぜひこれを前向きにとらえて準備をして、その留学生、あるいは国際化というものを、大学を巻き込んで活用するというのをぜひお考えいただきたいということです。細かいことを言えば、町のサインを国際化する、県内を国際化する、多国化するということも必要ですし、活用としては、国際観光への留学生の参画などが考えられます。つい先ごろ、留学生交流推進会議熊本の中で、熊本城ボランティアガイドの講座をやり始めて、留学生が自分の母国からきた人たちを、熊本城に案内するというような仕組みをつくろうとしている動きもあります。それから、県とか市の、海外の姉妹都市、姉妹県との交流を大学と一緒にやりませんかということ。それから海外オフィスについても、熊本大学等は持っていますけれども、運営費が高額で他の大学は持てない状況ですので、県とか市と共同で、海外オフィスを持つということが必要だと思いますし、海外で県がフェアをする、大学がフォーラムをする場合には、官学共同共催、相互協力でぜひ実施をしていただきたいと思います。

もう一点だけ、生涯学習教育の形成ということを、県の教育振興基本計画でうたっておられます。立派なものができるんですけれども、ぜひ、これの実行を担保する財源の確保を、知事をお願いしたいと思います。国の高等教育、あるいは科学技術振興政策の予算がどんどん削られております。地方で頑張っていたきたいと思います。

それから、私が今所属している放送大学という組織は、働きながら、あるいは家事で時間がとれない方々に通信制で教育をする国の組織です。設置形態上はそうなっていませんが、国がかなりの財政的措置をして、働く人々の生涯学習を、テレビ、ラジオの通信教育で行うというシステムですので、ぜひ聴衆の皆さんも参加していただいて税金を取り戻していただきたいと思います。

【田中委員】

私は、三点ほど簡単にまとめて申しあげます。大学進学率は問題でないという御意見もございましたけれども、熊本県の大学進学率が高校進学率と大きな乖離があるのは、ちょっと私は解せないですね。これは、福岡県の場合は全国平均とほとんど一緒です。ところが、熊本県の場合は、高校進学率は全国第10位にも関わらず、大学等進学率は、47都道府県中、43位というのは、ちょっと何か問題があるのではないかというのが、第一点です。

二番目に、これは少し申し上げましたけれども、私は長年の教育の結果、あるいは戦後教育の結果、日本の社会は劣化をしていると思います。自殺者が年間3万人以上というのが、十数年続いています。これは、明らかに社会が壊れているんだと思います。その他にも例えば、中学生の調査で「将来に希望が持てる」、日本はわずか29%ですね。中国は91%の人が自分の将来に希望を持っています。やはり、どこか壊れていると。経済、政治、あるいは家族、モラル、ひとつで言えば、社会が壊れているのではないかと、壊れつつあるのではないかとということを第二点に申し上げます。

三点目、これは教育の制度のことでしょうけれども、県の職員といった場合、大きく三つに分かれますね。ひとつは知事部局、これは知事さんの監督というか、行われている場所だと思います。もうひとつ、一番多いのは、教育委員会、教育庁ですね。これは一番数が多いと思います。県の職員として、数が多いと思いますが、どれだけ知事さんの意向なりトップの意向が浸透しているのかどうか、極めて私は疑問に思います。文部科学省の縦割りなり、あるいはそういう制度の問題があると思いますね。三つ目のジャンルは警察ですね。要するに、県の職員は、知事部局と、教育委員会と、警察と三つあるだけけれども、一番数の多い教育委員会関係のところですね、知事の意向がどれだけ行われる制度になっているのかどうかということが、非常に私は疑問に思っています。これは、さっき申しあげましたけれども、給与の問題もそうですけれども、そういったことで、教育の制度についてやっぱり私は問題があると、それがひいては、社会の劣化につながっているということを申し上げたいと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございました。橋田さん。

【橋田委員】

はい。私は、二点だけ申し上げます。それほど難しいことではないと思うのですが、やはり先生が一番大切だと思いますから先生の先生というか、先生をどういうふうに教育し、また、優秀な先生をどう獲得するかということが大事ではないかと思います。今、私の会社も三本の柱のうち、最も大切にしているのが人材の育成であるわけですが、それは入社した時から10ヵ年計画、15ヵ年計画に従った長期人材育成計画に基づいて教育を行っています。その時に一番大事にしているのが、導入教育なのです。会社に入ってきた時の志教育、それを非常に重視しています。その時の先生は、自衛隊の中で特に優れた指導官に来ていただいております。時間がありませんので、具体的なことは申しあげませんが、素晴らしい指導方法で様変わりし、びっくりしました。また、後ほど時間があればお話をさせていただきます。ですから、先生を第一番手で考えて頂ければと思います。もう一つは、どうやって子どもたちに、あるいは中高生に、終始一貫した志の教育をしているのかなと思います。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。

【細川委員】

具体的な例がいくつかあるんですけども、時間が5分でしたら、そのうちの一つしかお話できませんが、ひとつだけ。日本中で、手をあげてくださってよんでくださった中学校に、何十校と参りましたけれども、最後までやり遂げて大成功した中学校は、今のところまだ一校しかできていません。どんな中学校かと申しますと、松本市山形村朝日村組合立鉢盛中学校というところで、中学校570人の生徒が、全員総合学習の時間に障がい者理解の勉強、授業をしてくれました。でも、先生方が障がい者理解をしていないので、授業ができませんので、地元の私たちの仲間のスペシャルオリンピックスのコーチや、または、家族や本人が授業に出かけて行って、交流をしました。そして、全体集会で私も一緒になって討論会みたいなのをいたしました。それは、あくまでも座学でした。次に、実際に障がいのある人と一緒に友達になってほしいと思いましたので、ニュースポーツであるフロアホッケーというスポーツを、誰にとっても初めてのスポーツなんですけれども、それを知的障がいの人たちと一緒にやってもらうことにしましたが、地元にある養護学校、今の特別支援学校に断られました。そんな中学校に、わざわざ出かけて行って一緒にスポーツをしても何にも役に立たないというか、時間の無駄というか、自分たちのカリキュラムは目一杯であると、いろいろな理由があったと思います。それで、一緒に交流してくれる人がいません。学校としても熱心に働きかけ、地域にある5つの施設に声をかけました。4施設から断られました。1施設だけOKでした。その施設の施設長が、その利用者の中に二人スペシャルオリンピックスのアスリートがいたために、理解をしていただいて。一施設だけですから、二十数人しかいません。それで、中学校の全生徒と交流はできませんので、2年2組が選ばれて、そのクラスの総合学習の時間に、その施設からマイクロバスでやってきてくれて、体育館で、フロアホッケーという誰にとっても初めての実は大変楽しいスポーツを始めたわけです。中学生のみんなは最初はふてくされています。なんで自分たちのクラスだけ、こんな障がい者とやらなくてはいけないのか。中には車イスの人もいますから、車イスの人をどうやって指導したらいいのか分からない。しかも、マンツーマンで相手を決められたわけです。それで大変戸惑った中学生たち。ところが、そこから毎週始まったわけです。結果的に7回交流が行われたあとどうなったかと申しますと、大成功です。というのは、どこの学校もそこまで、障がい者と交流をしてくれる学校はなかったんです、未だに。ところが、そこだけしてくれたのは、実は大変荒れた学校で、校長先生があらゆる方策を講じてもしじめが止まらないということで、絶望的になっていた時に、私の講演を聞いていただいて、すぐに申し込んでくださったという経緯があります。それで、もう必死だったんです。それで、そこまで徹底して交流してくださいました。おかげで、そのクラスからいじめが消えていきました。そして、それが全校に、その影響がどんどん、じわじわ広がって、ついに、その学校のいじめがほとんど無くなってしまった。それを喜んだ演劇部がそれを演劇にしてくれて、PTA、保護者を呼んで、生徒全員にその劇を披露してくれるということになりました。その半年後に、私が主催しました教育フォーラムに、山形でその

年はあったんですけども、松本市から9時間くらいバスに乗って、その演劇部がわざわざ来て、披露をしてくださったんです。その数ヵ月後、学年末に学力テストがございましたら、県の中学校の中でもその中学校は、一番ビリからいくつか、数えられるくらいの悪い成績だったそうですが、わずか半年のその交流によって、学力が上がって、県の半分くらいの上位に上がっていったと。ただ、障がい者と交流したことによって、これだけのすごい成果が上がったってことは、先ほどから皆様のお話があるように、つまり生きる力というか、人間力が子どもたちに、わずか数回の障がい者との交流でついたということです。つまり、人の役に立つということの喜び、それからやり遂げた時の達成感、それから自尊感情、自信、そして、自分自身で、人の前で堂々と自分の意見が言えるような子どもに変わった。それまでは、いじめが蔓延化しているので、みんな自分の意見が言えない。だから、勉強にも力が入らないのは当然でございます。そういう一番のコミュニケーション能力とか、全て人間の力になるそういうものを、子どもたちがわずか数回の知的障がいの人たちとの交流によって学んで、目を輝かせ堂々と人の前で発表できる。先生たちは涙を流して、その発表を聞いているという最後の全体集会に、私行かせていかせていただいて、本当に喜んでいただきました。ところが、絶対にずっと続けるとおっしゃってくださったんですけど、悲しいことに、翌年の4月にその校長先生は教育委員会の指導主事になられて、学校を離れてしまったし、担任だったその先生は、やっと赤ちゃんができたということで、産休をとられました。さらに新型インフルエンザで休校があり、総合学習の時間がなくなったということで、2年目が続かなかったんです。今が3年目というところなんです。これがひとつの例でございます。時間がないので、たったひとつの、この中学校の交流しかお話できませんでしたが。

今、熊本で始めているのは、各大学にお願いしているオープンカレッジです。生涯学習。全ての人たちが一生涯勉強するということですが、知的障がいの方たちは、特別支援学校を卒業したら、一生知的に学ぶ場はありません。それを、どうぞ熊本の大学でオープンにしていきたいというお願いを、今しています。もちろん、他の学生と同じような条件でなくてもよろしいんです。月に1回か2回の授業でいいんです。そしてその授業の時に、座学の時には、その学校の教育学部の学生に、パラレルランナーとして一緒に授業受けて、補助をしていただく。そうやって、大学生の先生のためごの人たちに、学生の頃から障がいのある人たちと友達になっていくひとつの方策だと思います。他にもいっぱいあるんですけども、時間がきましたので、もう、既に一新校区で素晴らしい取組みを始めました。障がい者の中学生、高校生が、地域で週に1時間、お仕事体験をするというふれジョブプロジェクトというのが、一人、二人から始まったところでございます。これを、熊本県中に広めていきたいと考えています。あらゆるできることを始めますので、ぜひ県としても応援をしていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

【松島委員】

先ほど、皆さんがおっしゃっておられますように、教育で重要なことは、キャンパスの中でいろいろな学習もありますけれども、それと同じくらいに重要なのは、社会とのつながり、世界とのつながりということで、キャンパスの外に出る。例えば企業見学であるとか、課外授業であるとか、他校と

の交流であるとか、さらに言えば留学。自分のキャンパスの外に出す機会をつくる。それからもうひとつ、同じキャンパスの中であっても、通常の先生との対面ということではなくて、そこに先生以外の人を呼んで話を聞く。あるいは、そこに、いろんな人をよんで交流をするという機会をできるだけ増やすというのが望ましいのではないかというふうに思います。その点で、ひとつご紹介したいのは、私は東京で経済同友会というのに属しておりますが、経済同友会というのは、いい仕事をしているんですけども、あんまりメディアに高く評価されていないんですね。なぜかという、毎年毎年、提言をすごく出すんですが、提言だけで終わってしまっていることが多いんです。教育についても、ずっと提言してきたんですが、十年前に、言うだけではだめだから、自ら時間と体を使って学校に行こうということで、出前授業を始めました。どうふうに思っているかといいますと、継続は力ということでやっぱり良かったなど。良かったというのは、十年分まとめたパンフレットがありますので、あとで置いて参りますけれども、先生方、特に生徒から、その中の一人でも、非常に感動を受けたというような感想もあるわけです。そうすると、やっぱり行って良かったというふうに思いますし、また副次的な効果として、先生方とか、校長先生とか、父兄とも時に交流することがあるわけでございます。そうしますと、先生方がいかに大変な状況であるか、また校長先生の面からみるといろいろいじりたいけど、なかなかいろんな先生がいて、できないというもどかしさもかれますし、父兄の方からはまた違った話が聞かれます。それから、生徒も、一般にいろいろ言われておりますけれども、私の実感は、学校によって、相当生徒の態度が違うというのが実感です。でも、実際に行くことによって、我々もそういうことが分かり、出前授業を始めて良かったと思っております。聞くところによりますと、知事も出前授業をされているということで、大変生徒に勇気と希望を与えることではないかと思えます。ここに小栗さんもいらっしゃるんで、願わくば熊本の同友会でも、ぜひ出前授業というのを考えていただいて。東京の場合は、10年間で約1,000校くらい行っています。去年は、150校行っていますね。ですから200日くらいの授業とすると、ほぼ毎日くらい行っています。東京は非常に人が多いので行けるということもあるので、なかなか熊本ではそこまで行けないかもしれませんけれども、やはり企業にとっても、人材は人の財、人の宝ということで、人財でもありますので、企業の方にも、将来の投資ということで、むしろそういう現場に行って出前授業をしていただくといいのではないかなと思います。

これが、私の経験でありますけれども、あとひとつ申しあげますとサッカーのワールド・カップがありましたけれども、カメルーンのチームも参加しておりました。日韓共同主催のサッカーの時に、大分県の中津江村にカメルーンの選手が滞在して練習に励んだということで、村民との交流があり、若い子どもたちとの交流もあった。アフリカの肌の黒い人たちとも全く、ほとんど抵抗なく彼らは付き合いえたということで聞いております。従って、先ほどの話のように熊本でも交換留学生とか、今後また増えるということであれば、ぜひそういう方にも学校に来ていただいて、単に一日だけでなく、もう少し交流するような、そういう触れ合う機会をつくっていただくということが、これからの日本が世界とつながっていくといううえで、非常に重要なことではないかと思えます。

【蒲島議長】

すいません、非常に限られた時間の中で、いつも追い詰められたようなお話になってしまいますけれども、せっかく専門家の方がおられ、傍聴者が来ておられますので、二人だけ質問を受け付けたいと思います。質問はありますか。

【質問者1】

松下幸之助さんが、「モノをつくる前に人を作りなさい、モノを売る前に、人を売rinaさい」とおっしゃいました。人材も、人材育成と人財と二つありますけれども。熊本県がどういう教育をしているのかという点、また、モノを売る前に、どうやって信用を沿えて売っているのかということについて、お尋ねします。

【質問者2】

二年くらい前に、落ちこぼれた人が先生になるという、宮本延春さんの本を読んだんです。非常に過酷な運命で、15歳で見習い大工、18歳で両親と死別した。そういう中で、本人が頑張って名古屋大学の理学部物理学科に入ったわけです。本の中で、「人は夢があれば変わる」ということを、おっしゃっておられます。夢を持ち続けるということも大事だと思いますけれども、あの本を読みますと、先生方が本当に宮本さんに沿って、個別指導を4時間も5時間もしてあげているわけですね。昔から、熊本県でも本当に個別指導を頑張らせてこられたと思います。なぜそういうのが、だんだん無くなってきたのかなと思っています。委員の方のお話を聞いて、原理、原則論は全く同感しましたが、具体的な施策として、どういうことを取り組んだらいいのかということをお示しいただきたいと思います。以上です。

【蒲島議長】

私が答えてもいいのですが、皆さんせっかくいらっしゃるので、1分ずつお答えいただいて、最後に私が総括したいと思います。

【小栗委員】

(質問1に対して)確かにおっしゃるように、そのために教育というものがあると思うんですね。ですから、おっしゃるように、その人の夢というものがあるわけですね。まず夢を持つ。その夢を実現するためにどうしたらいいかということ、それぞれの方々が考える。それに対して、教育がどうやってサポートしていくのかということではないかと、私は思います。そのサポートをきちんとやれば、自分がやりたいことが、例えば中学で、高校で、大学でなのかもしれません。それで、自分をもっと専門性を高めなければいけないということであれば、上のほうの学校に行って、それを高めていくというのが夢の実現につながるのではないかと思います。

【崎元委員】

二番目の方の質問に。答えにならないかもしれませんが。今、教育あるいは学校のシステムというものを延々と人間が作ってきたわけですが、その教育というものにはかなり過大な要求がなされているということがあります。それで、先ほど細川さんから障がい者の話がありましたけれども、一定の教育がみんなに一樣に押し付けられているという、語弊がありますけれども、同じペースで同じ時期に、同量、同質のことをしないとイケないという状況があるんですね。ですから、おっしゃられたように、個別指導はどうなのだというふうに疑問を持たれると思いますけれども、アメリカ等の教育では、もう少し自由度がある。いろんな人が参加できる自由度もあるし、ペース配分もある程度自由だし、教える内容も先生にある程度任されている部分もある。変なことが教えられてもいけないので、いろいろ拘束があると思うんですけども、やはり、今の学校制度という教育システムが、特に義務教育が国や行政が関与していろいろ制限を加えてきたところを、もう少し自由にできないかなと思います。ということは、各生徒、学生に対して、あとから伸びる子もたくさんいるわけですから、個別にある幅を持って教育をすれば、つぶしてしまう能力も、つぶれなくてすむという面は多々あるのではないかと思います。

【田中委員】

2番目の質問に私の考えを申し上げます。教える人の質、教員の質というのは非常に大事だと思うんですね。そのためには、先ほど申し上げましたとおり、教育者にも、きちんとした人事考課なり人事評価制度があるべきだと思います。そうすると、やる気のある先生はもっと立派な教育をしてくれると思います。

【橋田委員】

松下幸之助さんの語録にいろいろ載っておりますけれども、私どもは、人は宝ということの基本にしておりまして、その宝も財の宝ということにしております。先ほども申し上げましたが、経営方針の三本柱の中の重要な方針として、人財の育成を掲げ、人財開発部を立ち上げ、中長期的なカリキュラムを作成し、そのカリキュラムに沿って人を育てるようにしています。やはり、企業は人が一番大切です。企業が持続的な発展をするためには、従業員のモチベーションが非常に大切でありますので、それぞれが目標を持って、その目標はある意味では夢につながり、希望につながるわけです。それを持たせて、手助け、育成することに注力しております。それから、なんといっても、トレーナーのまたトレーナーといいますか、教える先生が必要であると考え、私どもは、オンザジョブトレーニングといって、会社で仕事をしながら教育しております。その指導者の教官を指導するという制度もつくって、実際に企業活動を行っています。ご参考になれば幸いです。

【細川委員】

私は、人間の生きる力に関して大事なことは、感動だと思っております。感動の無くなった人間は生きている意味はないんじゃないかと思います。では、どうしたら感動ができるかというと、素直

な心、正直な心を常に磨くということだと思っています。一日10回感動できる人間は、きっと100才以上、元気で長生きするのではないかと思っておりますので、私は少し高めの目標を持って、間違いない使命感を持って、そして情熱を持って行動し、そして、人の役に立てるといことはどんなに幸せかということをおは人間の本能だと思っておりますので、そういう幸せな人生を送りたいと思つて、一生懸命することが、まわりの人との共感を結ぶことになるし、人間の絆が深まっていくもの。結局自分が原点だと思つます。自分の可能性に精一杯ひとりひとりが全力で向かていくということが、全ての教育の原点ではないのかなと思つております。失礼いたしました。

【松島委員】

私、幸之助さんのまさにその通りだと思つます。日本の武将の武田信玄も「人は石垣、人は城」と、城がなくても優秀な武将がいればそれで勝てると言つているのだと思つます。

ある企業は破綻する、ある企業は伸びていくというのがありますが、破綻する企業には、一時的なショックで、例えばリーマンショックのようなかたちでだめになる。これはある意味共通であります、長期的に構造的にジリ貧になっていく企業のトップを見ていただくと、やはりトップの質というのがあつると思つます。成長していく企業も、一時的なバブルで成長するといことはあるにしても、持続的に成長する企業は、優秀なトップだけでなく経営陣も含めて、そこにまさに、人材がいるからだと思つます。

それから、夢といことですが、具体策といこと、少し今急にひねり出してみたんですが、今家庭は核家族で、共働きで、なかなかしつけができない。その代わりに何ができるかといこと、小学生がお年寄りの施設や介護施設にもっともつとつと行つて交流してはどうか。お年寄り、若い人と会うことによつて生きる力を与えられる。若い人も、おばあちゃんおじいちゃんが喜んでくれると、何か自分は幸せなことをしたといようなことを思えるのではないか。介護施設でなくてもいいんですが、お年寄りとの交流、これから高齢化社会ですので、その高齢化社会の方に、生き生きとした感覚を与えるとい意味で、若い子どもたちとの交流も考えていただければいいのではないかと思つます。

【蒲島議長】

はい、ありがとうございました。時間が限られておりますので、私は二点について、最後にお話して、この未来会議を終わりたいと思つます。

第一に、この教育の場が、社会経済的格差の拡大に働かないように、むしろ、教育の場が、社会経済的格差を縮小するように。だから、社会経済的に非常に恵まれない人にもチャンスを与える。私は、チャンスといことは、とても大事だと思つています。

それから、二番目に、熊本県政の中で私が一番力を注いでいるのが、細川藩の藩校の名前をとつて、時習館構想と名づけておりますけれども、熊本には、私立高校に約3分の1の学生がおります。その方々のために、この時習館構想といつものをつくつて、時習館といつ名前の下に、私立高校がいくつも存在する。そこで、時習館としてできることをやつていきます。そこには、夢と誇りと自信、

そういうかたちで私立高校の底上げをやっていきたいなと思っています。

社会経済的な格差を縮小するために、とても素晴らしい試みだと思うのは、県立大学が今年から二人、生活保護家庭の子どもを入学させてくれました。その子どもから手紙をもらったんですけど、「絶対大学には行けないと思っていたけれども、この制度によって行くことができた。」と。その喜びに溢れているんですね。やはりチャンス。そういう意味で、たった二人だと思うかもしれませんが、チャンスがあることによって、生活保護家庭の小学校の子、中学校の子も未来が見えてくるのではないかなと思っています。だから、チャンスを与えるような教育システムをつくりたいというのが、私の熊本県政における教育の考え方であります。これは、教育長とも既に話しておりますので、きっとその方向に向かうと思います。そして、最終的に、先ほど大学進学率の話がありましたけれども、それをどんどんやることによって、結果として進学率が上がるというのが私の理想であります。そういう意味では、進学率の指標もとても大事だと思っていますので、そういうかたちでの進学率の見方をしたいと思っています。以上です。

今のが、総括になったかどうか分かりませんが、時間も過ぎましたので、ここで終わりたいと思います。本日は誠にありがとうございました。事務連絡がひとつありますので、よろしくお願いします。

【事務局】

委員の皆様長時間ありがとうございました。議事録は、後日県のホームページに掲載させていただきます。また、次回の会議は10月に熊本市内で開催予定です。よろしくお願いいたします。